

# 中国の米価格支持政策の見直しと質を求められる米生産

理事研究員 阮 蔚

中国は現在、米、小麦という主食穀物での価格支持政策の改革を進めている。価格支持政策は、穀物が供給過剰になった場合、政府が決めた「最低買付価格」という名の支持価格により農家から買い付けして市場価格と農家の生産意欲を維持する政策である。2004年に、それまで長年、食糧の買付けと販売を統制してきた食糧管理制度を廃止し、食糧流通の市場化改革に突入した際に導入された。しかし、国産穀物の価格競争力低下による輸入増等グローバル化の影響、所得の向上による消費者の嗜好変化など、価格支持政策をめぐる環境が大きく変化した。

結果的に価格支持政策は行き詰まり、その見直しが迫られている。18年に米の支持価格は前年比7.4～13.3%の大幅な引下げと生産者への直接補てんを行うことが決定された。一方、今後の方向性について、米の価格支持政策を完全に廃止し、価格形成は市場に委ね、市場価格の変動に対応して生産者補てんを実施すべきという意見もあり、今後、たとえ価格支持政策が維持されたとしても、その支持価格は生産コスト近辺までさらに引き下げられることが考えられる。

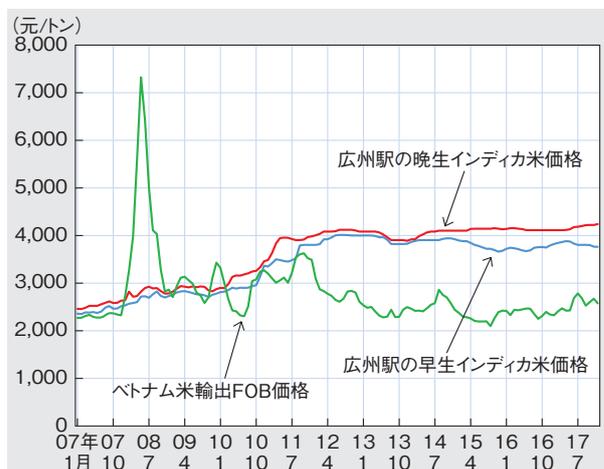
## 1 生産、輸入、在庫の同時増加

価格支持政策が導入された04年にさかのぼってみると、支持価格は当初、生産コストすれすれの水準に設定されていた。しかし、07年から世界的な穀物価格の高騰を受け、中国は08年から支持価格の引上げによる国内穀物

増産の方向に踏み出した。支持価格は07～12年の5年間に早生インディカ米で71.4%、中晩生インディカ米73.6%、ジャポニカ米86.7%と引き上げられた。その結果、農家の生産意欲が高まり、米は同期間に9.4%増産されたほか、小麦もトウモロコシも大幅な増産となった。

問題は、世界的な市況高騰によって世界全体で米を含む穀物の生産量が大幅に増加し、過剰生産に陥ったために、12年から米を含む穀物の国際価格は反転し、下落し始めたことだ。国際市況が悪化するなかで、中国政府は引き上げた穀物の支持価格を維持した(第1図)。その結果、中国の米価格が国際市況を上回る状況になり、輸入が刺激された。中国の米輸入は関税割当制を実施しており、割当枠(532万トン、うち長粒種インディカ米266万トン)内の関税率は1%しかない。そのため、12年に中国の米輸入量は234万トンと前年(58万トン)の4.1倍にも拡大したのである。

第1図 中国米の国内価格とベトナム米輸出FOB価格



資料 Wind社、国家糧油信息中心

さらに問題となっているのは、中国はその後も米の支持価格を14年まで継続的に引き上げ、16年まで早稲を除き、支持価格を高水準に維持してきた。それによって国産米の増産と農家の収入増が達成できた反面、国際価格とのギャップが拡大し、輸入量は15年に335万トン、16年に353万トンへと拡大した。これ以外にベトナムなどからの密輸入米は百万トンから数百万トンに上っているとの報道もある。国内生産が高水準で続く一方、輸入も増加したことで、米の国内市況には常に下落圧力がかかり、政府は農家の収入と生産意欲を維持するためには支持価格による買付けを継続的に実施せざるを得ないというジレンマに陥った。13～17年まで政府は毎年3,000万トンほどの米を買い付けしたものの、高値では売れるはずもなく、その大半は在庫となってしまった。現在、中国政府の抱える米在庫は1億トン以上に膨らみ、大きな財政負担となっている。

## 2 良質米への追求

価格支持政策にはもうひとつ大きな欠陥が内包されている。この政策では買付価格は味など品質に関係がなく均一である。当然ながら、農家は利益を最大化するために味より生産量の増大に力を入れてきた。だが、消費者はより味の良い高品質米を好むようになった。

例えば、中国最北の黒龍江省は08年頃に中国最大のジャポニカ米の産地となり、16年にその生産量は中国のジャポニカ米総生産量の3分の1にあたる1,566万トン(玄米、モミベースの0.69とする)にも達した。しかし、黒龍江省北部の産地で増産した米の相当部分は味が劣り、政府の支持価格をベースにした小売価格では市場で買い手がつかず、政府の買付けに頼らざるを得なかった。ジャポニカ米自体は市場で人気が高まったにもかかわらず、同

省産のジャポニカ米の大半は政府の倉庫で眠るだけとなった。

同じ黒龍江省産のジャポニカ米の中でもブランドとして中国国内に名声が響いた「五常米」は政府の支持価格の数倍から十数倍の値が付き、政府に頼らず市場の流通だけで全量がさばっている。「五常米」の中には中国で販売されている日本の輸入米の価格に並ぶものもあるほどで、引く手あまたとなっている。年々増えている訪日中国人観光客の中には筆者の友人もおり、彼らは日本の米のおいしさを絶賛し、米をお土産にして帰る人も少なくない。インディカの早稲米に至っては、価格面でベトナムやミャンマー産等に負け、味ではタイ産香米に及ばない。タイ産香米は中国産インディカ米より価格が高いにもかかわらず、中国の市場で売行きが伸びている。こうした状況を見れば、中国ではすでに価格より品質を重視する消費者層が形成されており、高価格でも高品質の米は売れる市場となっている。

18年以降、もし米の支持価格が大きく引き下げられたら、価格要因による輸入はとりあえず減少することとなろう。ただ、低品質米の生産も減少し、その結果、低品質低価格の米輸入が一定水準で恒常化することが考えられる。

日本産米、五常米、タイ産香米等が代表する良質米は政策の影響は受けず、着実に需要を伸ばすのは間違いない。中国国内で高品質で環境面でも安全な米の生産が量的に確保できなければ、高級米こそ輸入の主戦場になる可能性がある。16年12月に中国農業部等の主催で初めての「中国産ブランド米大会」が開かれ、五常米を筆頭に「十大ブランド米」が選出・表彰された。中国の米生産も量から質を追求する動きが出てきたのである。

(ルアン ウエイ)